

---

NSSF **都市学園軍**

カトタク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

N S S F 都市学園軍

### 【Nコード】

N 2 7 6 4 Y

### 【作者名】

カトタク

### 【あらすじ】

日中戦争が終わり早2年。国内の治安は密入国した外国人によって悪化が進んでいた。そんな折、少子化による国防軍の定数減に備え、国会は学徒訓練指導法という学生兵士訓練のための法律（と見せかけた外国人からの学生の自衛の容認）を設けた。もともと部活動として自前の警備部隊を持っていた無島学園はその法律ができたと同時に学園軍の編成に乗り出した！！

\*いちおフルメタの二次になっていますが、実際何の関係もありません。

せん。御料章ください

## 1 話（前書き）

結構前から書きためていたものです。

ではどうぞ

## 1話

成武12年。

時の天皇（とその息子）は悩んでいた。

戦後、彼ら天皇家からは、政治的主権を剥奪されているので、それは財政とか軍事といった政策絡みの悩みではない。

孫（娘）のことだった。

来年で6歳になる孫（娘）の佳代子の入学先の小学校のことだった。まごうことなく佳代子のことだった。

入学先の候補は3つある。

1つは天皇家の子供が入学するのが通例で小中高大一貫校の学習館だ。もともと皇族や華族のために開かれた学校のため信用も高く、宮内庁の職員もそこを勧めている。しかし、正直私はあの学校が嫌いなのだ。無駄に態度の大きい教授陣に世辞やおべっかが見え見えの同級生。一緒に学んできた友人の中で真の友人といえるのは十数人しかないだろう。2つ目は、お茶の湯女子大学付属小学校である。都内のお嬢様を通う私立小中高大一貫校であるため、警備や施設の面では問題ないだろうが、生徒の問題がある。お嬢様といえど、一般人であり、いじめが起こる可能性もある。3つ目は私立の無島学園だ。もともとは小さな小学校だったらしいが、数年前運営陣に元国会閣僚が入って急激に成長し、今では敷地内にビルを構える小中高大一貫校になっている。更に部活動の一貫として自前の警備部隊を保有しているため警備も心強い。ただ生徒主体の部隊のようなので、その実力は本職の隊員からすると、やや劣るのだろう。

散々悩んだうえ、天皇が選んだ選択肢は、3つめの無島学園への入学であった。神の裁量か、その判断は、多くの意味で正解だったのである。

その2年後、国会で国防軍の定数減の対策が審議され、

「学徒訓練指導法」・・・軍事への関心を高めるために文部科学省が定める各校に生徒による武装組織を設置、専門教官が指導を行う。が制定、施行された。その流れの中で、無島学園は大きなリードをしていることをアドバンテージに、無島警備隊、通称NSSP(Nashima Students Safety Police)の、人員、装備、施設の拡充を行い、無島都市学園軍、通称NSSF(Nashima School Safety Force)という組織に発展。日本国内で国防軍、警察に次ぐ武装組織となっていた。

日本の神奈川県山と海と都市に囲まれた某所に俺たちの学び舎は存在する。敷地面積は延べ100万平方メートルであり、東京ドーム約23個分に当たる。全校生徒約1万6千800人の小中高大一貫校であり、それらの人員全員が入居する寮も完備されている。学園内で最も人気のある部活動であり、警備部隊であるNSSF(無島治安維持警備軍)には全校生徒の3分の2である1万1千200人が加入し、予備隊員を含めれば1万5千人余りの隊員がいることになる、数と装備を合わせれば、国防軍には及ばないが一流の戦闘能力を保持する部隊である。学徒訓練指導法によって他校にも同様の部隊が誕生しつつあるが、いずれも1個小隊程度の規模のもので、

1師団以上の人員を誇るこの部隊に勝るものはない・・・。  
この部隊であるが、平時は授業用高層ビル4棟を中心として4つに区切られた中を第1～第8普通科連隊、第1～第4機甲中隊、第1～第4特科中隊、第1～第4後方支援連隊、中央機甲ヘリコプター隊、輸送隊、航空戦闘団と分担され、その中でも第1地区第1普通科小隊というように細かく区別されている。が、有事（学園判断）の際には全地区を統合し、1師団と後方支援旅団にまとめられる。NSSP発足以来20年、成武20年現在、未だ統合されたことはない。

成武23年5月10日

「第2分隊からNFHQへ。ポイントF2前にて敵グループ3名を発見。対象はA棟に逃走中。携帯火器としてアサルトライフルを所持している模様。オクレ」

『NFHQから第2分隊。周辺の索敵を続行せよ。対象は第3分隊に追わせる。オーバー』

内心で舌打ちをする。

第3分隊がいるのはC棟だ。ここからの方が断然近い。

最初、俺達はF棟正面玄関を警備していたのだが、C棟の職員用玄関から侵入した敵4名が隣接するB棟の玄関警備をしていた第5分隊を壊滅させ、外で待機していた別動隊60名を建物内に侵入させたことから、玄関警備を一旦放棄、F棟内の索敵を命令されたのだ。その時、職員用玄関を警備していた第1分隊は、別動隊の60名を発見し、追跡していたため、運悪く2名しか玄関前に残されていなかった。しかも新入隊員である。侵入部隊である4名の多方向からの攻撃にパニックを起こした新人は、構えていた64式小銃を乱射し、予備弾倉がなくなつたところを撃たれたのだという。

「分隊長。別に説明しなくても・・・。今は作戦に集中してください」  
おっと

「スマんな。で、浅田。敵主力グループは見つかったか？」

「いや。でも見た限りじゃ自動小銃を所持してるのは敵部隊の半数以上、それ以外でもPDW（個人防衛火器）並の装備であることはわかった」

あまだじゅう

浅田崇二等学曹は第2分隊の情報屋である。いつでもどこでも最新パソコンを持って歩く彼は、今もこの建物の監視カメラにハッキングをかけて、カメラの映像を使って敵を搜索している。

全く司令部もカメラがあるなら携帯情報統制端末に情報開示してくれてもいいものを……。

「この間の戦闘ヘリからの無差別ミサイル攻撃よりは断然いいよな・

・」

「だよな」

そう話している間も索敵の手は緩めない。

浅田は各所に設置されたカメラの映像を情報統合端末を使って監視している。

「あ」

「……どうした？」

「敵主力と思われるグループを発見！　ここの真上です！」

「第2分隊からNFHQ。敵主力と思われる部隊をカメラで確認。指示を乞う」

『NFHQから第2分隊。こちらでも確認している。直ちに索敵を中止し、該当ポイントへ急行せよ』

「了解！」

つてかカメラを見ていることに対しては何も言わないのな……。

「よし。ポイントF3へ出撃！」

「了解！」

すでに通信内容を理解した部下の行動は早かった。

全員が89式小銃を持ち、階段を駆け上がる。その途中も銃口を上へ下へ横へと向け、警戒を怠らない。

カメラからの情報ではF2-3の真上の部屋なのでF3-3へ移動

することになる。もう一度モニターを見たとき、カメラは破壊され  
たらしく、砂嵐しか映っていなかった。従ってこちらの接近に気が  
付いて警戒している可能性が高い。むしろもういない可能性もある。  
89式小銃を肩にまわし、かわりに腰のホルスターに入れてあるP  
226を抜くと、同じく腰にのポーチにいれてあるM84スタング  
レネードを右手にもち、階段の踊り場から3階の様子を覗く。はた  
して階段上には2人の警備がいた。

2人ならグレネードよりも消音器付きの銃で撃ち殺したほうが賢明  
だと考え、M84スタングレネードをしまつとP226を両手で構  
える。俺のP226はSCT型で、初期の15+1発装填よりも多  
く、9ミリパラベラム弾ならば20+1発装填が可能になっている。  
更にイタリア製のレーザーサイトを装着できるように自分で改造し  
たため、若干重くなっている。

レーザーサイトのつまみをひねり、レーザーのスイッチを入れ、警  
備の額に向けて光線を伸ばす。額に赤い光点が現れたのを確認する  
と、引き金を引くと、サブレッサーをつけた銃口から9ミリパラベ  
ラム弾が発射させられる。1発が1人の警備の額を赤く染めると、  
もう1人の警備は面倒なことにすぐ警戒態勢をとり、無線機にむか  
つてなにかを吹き込む。せめて本隊には連絡させないような始末し  
なければならぬのだが、連絡されてしまったからにはしょうがな  
い。

「突入！」

一斉に第2分隊6名が3階に突入し、警備を射殺。潜伏していると  
思われるF3-3にM84スタングレネードを投げ込む。数秒後に  
100万カンデラの閃光と180デシベルの爆発音が炸裂した。

一瞬だけ耳と目を塞いでいた俺達は、F3-3へ89式小銃を用心  
深く構えたまま突入する。

はたして室内には15人の敵がのたうち回っていた。

状態を確認する前に室内に突入した俺たちは敵を囲んで銃口を突き  
付ける。スタングレネードの効力がきれた敵は自分たちの状況に気

付いて、次々と武器をおろし、投降した。その後念のため室内にある武器を全て回収し、敵を縛ってから身体検査をして本当に全ての武装を解除できたか確認する。

「第2分隊からNFHQ。敵部隊15人を拘束。現在の状況を知らせ」

『NFHQから第2分隊。第3分隊と第4分隊が敵32人の部隊を攻略した。残存の敵部隊も後退を開始した模様。これをもって作戦を完了とし、怪我人の治療にあたれ。オーバー』  
ピンポンパンポン♪

気の抜ける軽い音とともに全校放送のスイッチが入る。

『こちらNFHQ。この訓練で、敵役の隊員の3分の2が制圧されたため、これ以上の戦闘を不可能と判断し、本訓練を終了する。繰り返す。これをもって室内訓練を終了する。ペイント弾に撃たれた者はすぐに水道で洗ってきなさい。なお一八〇〇時にA棟正面玄関前に総員集合とする。それまでに装備を片付け、校内を簡単に清掃せよ。ペイント弾が当たったところは特にしておくように。以上』  
清掃と言われたところで周りから溜息が入る。敵役だった隊員も同じくだ。

そう。

この戦闘は俺達NSSF…無島学園学生自衛部隊、通称無島都市学園軍の室内模擬訓練なのである。某デイズニールゾートに匹敵する学園敷地内には、授業用の本校舎ビルが4棟と、職員用宿舎と生徒用宿舎が1棟ずつ、東京ドーム半個分に相当する体育館が2棟、NSSFの訓練敷地が東京ドーム1個分、NSSF隊員用宿舎1棟、訓練用建物1棟、そして地下には武器・弾薬・保存食の保管庫が非公表で無数に点在し、駐車場には職員や大学生、一部の高校生の自動車やバイク、自転車の他に、国防軍から払い下げられた高機動車HMVや、軽装甲機動車LAV、89式装甲戦闘車FV、96式装輪装甲車WAPC、過去の遺物となりつつある7

4式戦車 M B T、対象的に最新の15式機動戦闘車 M C V、73式各種トラック、その他諸々の軍用車輛が多数駐車されている。学園敷地内では道路交通法が適用されないため、中学生から使用が許可されている。

駐車場の隣にはヘリポートが数か所あり、格納庫にはA H - 1 S D コブラ改が8機とO H - 1 A 改クナイが4機、U H - 1 J 改イロコイが15機、C H - 47 J A チヌークが4機格納されている。これらは主に校外の暴動や事故・事件に対してのもので、小学生から訓練を重ねた航空科の生徒が職員が操縦する。

とにかくN S S Fに所属する俺、金剛戦真 こんごうせんま 三等学尉は、一昨年国防軍に入隊して、N S S Fから除隊した秋本日向三等学尉の後任として無島高等学校第3地区（第3中隊）第1小队隊長、及び第2分隊隊長の職を一昨年4月に受領し、訓練と書類仕事に明け暮れているのだ。

「短間隔集まれ！」

第1〜第4分隊、第5〜第8分隊、要するに第3地区第1〜第4小隊の人員が集まり、反省と次回の大まかな計画を話し合う。

「佐伯士長、お前今日は少し射撃の命中率が低かったぞ？ そのスコープやめたほうがいいんじゃないか？」

「そうですねえ……。でもこれ高かったんですよ？」

「どうせネットで買ったんだろ？ ンなもんはちゃんと実物を見ないお前が悪い。次からは技本（防衛省技術研究本部）で選んで来い。」

「分かりました……。」

「浅田二曹、さっきH Qからハッキングはやめてくれと通告が来た。……次からはバレないようにやってくれ！」

「了解！」

そんなこんなで各員に課題と要望を伝え、分隊内での反省会が終了

した。

「では、明日から新入隊員の座学講義を行うから各自しっかり正しいことを復習しておくように。くれぐれも変なことは教えるな。では解散。分かれ」

長つたらしいがそれなりに身のためになる全体での反省会が終わり、今日の訓練は終了する。

「あ、戦真さん！ お疲れ様です。今日の訓練はどうだったんですか？」

そう言いながらタオルと水筒を渡してくれるこの娘は篠宮佳代子だ。マネージャーのように見えるが決してそんなものではない。つとていうかNSSFにマネージャーという種別はなく、確立した後方支援くらいしかない。そもそも・・・まあいい。話がずれてしまうからな。

「どうって・・・。別にいつもと同じだよ。敵と味方に分かれて銃を撃ちあうのさ。たまに戦車とかヘリコプターも使うけどな」

「今日の戦真さんもかつこよかったなあ」

俺だつて女の子にかつこいいと言われればそれなりにうれしい。だがまで。

「・・・お前、また訓練地区に入つたのか？」

「へへへ。入っちゃ「お前は馬鹿か！ 次からは絶対にするな。怪我したらとても困ることになる」え？」

「お前、自分がどんな身の上なのかわかつてるのか？」

「んゝ、よくわかんない」

「はあゝ・・・分かってないのかよ・・・」

「だってどんな状況でも戦真さんがいれば助けてくれますもんね？」

「あのな・・・」

あながち間違いないがそれでも俺にだって限界はある。

この篠宮だが、その実、春篠宮家の佳代子内親王なのである。実際

もうちょっと細かい種別があるのかも知れないが、大雑把にいつて内親王とは天皇の息子の娘のことです。正直俺なんか気安く（別に気安くしているつもりはないが）接していい相手ではない。それに本来ならSPや皇宮護衛官などに安全を確保されているはずなのだ。なのにわざわざ危険な訓練地区に足を踏み入れてくる。前回は戦車の目の前に飛び出してきたし、前々回は対戦車ヘリのM197ガトリング砲の射線上に飛び込んできた。そのたびに注意しているのだが、何度言っても「戦真さんを見るため」と自重してくれない。俺もここまでなると自分が処分されてしまうのではないだろうか。と本気で心配している。実際俺が心配なのは彼女なのだけれども、彼女が天皇家の一員と知ったのは、一昨年の夏なのだが、その時の状況は本来なら普通の高校生が経験するようなことではないものだったのだ……

## 1 話（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております

## 2話（前書き）

隊員たちはすでに何度か戦闘を体験し、（よくも悪くも）慣れてい  
ると考えてください

## 2話

成武21年8月5日 無島学園

「ったくなんでこんな暑いときに訓練なんだよ・・・」

季節は真夏で気温は40度超。最近の夏はこんなのが当たり前だ。

俺は体にびつちりと張り付いた都市迷彩二型夏仕様をパタパタと扇ぎながら集合場所である総合駐車場へと向かっている。今日は・・・確か他校との合同訓練だったはず。NSSF要員では無い生徒は実家に帰るか生徒用宿舎のクーラーの行きとどいた空間でのんびりと惰眠をむさぼっているものがほとんどだ。

「早くしろ！ もう少して出発だぞ！」

そう怒鳴りながら96式装輪装甲車の前で手を振っているのは加賀美義仁 かがみよしひと 三等学佐だ。NSSF総合第3中隊を指揮する直属の上官であり、二歳年上の俺の従兄弟というタメで接しているのか悪いのかよく分からない存在である。こんな暑い中でよくこんな暑苦しい人が生きていけるもんだと思いつつ駆け足でそっちへ向かう。

「はぁ。了解です。ですからもうちょい涼しい雰囲気にしてください」

「む。なんだよ涼しくって？」

「そのままの意味ですよ。さぁ、さつさと車輛に乗りましょう」

今日は校外にでて活動するため、車輛の運転は免許を持っている生徒がしなければならない。ちなみに俺は既に車輛免許の種別はすべて取得済みで、今年はヘリの免許に挑戦するつもりだ。なので、今回は人員輸送用の高機動車のドライバーを任されることになった。国際任務仕様の高機動車のため防弾化された車体にクーラーとCDプレイヤーつきの内装は冬はともかく夏場はともありがたい。一緒にいてくる96式装輪装甲車や89式装甲戦闘車にはクーラーがついていないので、申し訳ない気もするが。

「よし。〇八〇〇、総員乗車完了。車列行進開始！」

隣に座った加賀美三佐がそういうと、俺の運転する高機動車を戦闘に、高機動車が2輦、96式装輪装甲車が2輦、73式大型トラクターに積み込まれた89式装甲戦闘車が3輦、73式中型トラックが4輦の計11輦の車列がゆっくりと動き出し、開放された丈夫な鉄柵門をくぐり抜けていった。

「ん？ 何だありゃ？」

最初に異変に気が付いたのは、先頭の高機動車を運転する俺だった。装甲パトカーが道を塞ぎ、警察官が別の道への誘導を行っている。装甲パトカーとはトヨタ自動車のランドクルーザーをベースにした装甲車輦である。外見の塗装は上部白色に下部黒色、天井に赤色灯といった装備で、通常のパトカーと同じである。主に要人の護衛、又は輸送に用いられている。

「何があつたんですか？」

車を寄せて身近な警官に尋ねる。他の車輦は邪魔になるので路肩に寄せた。

「あ、応援の陸軍さんですか。ではこちらを手伝って下さい。もう大変だったんですから」

「あ、いや俺たちは・・・」

「急いで下さい！ 時間が無いんですから！」

「あ、はい」

「何がハイだ馬鹿！ すみません。俺たち陸軍じゃなくて無島学園の学生自衛部隊です・・・」

警察官のあまりの剣幕に咄嗟に肯定の返事をしてしまった俺は、加賀美三佐に怒られて、代わりに加賀美三佐が俺たちの身分を説明してくれた。

「え、ああ。そうだったのか。しかし困ったな。あと数分で陛下がここに到着するんだが、警備体制が全然整っていないんだ」

「？ 陛下って天皇陛下ですか？」

「ああ。陛下とそのお孫さんだよ。ここに遊びにくる予定なんだ」  
振り返るとそこは首都森林自然公園だ。確かに遊ぶにはもってこいだろう。

「こちら陸上国防軍。現在一般道の渋滞でそちらに向かうことができない。ヘリでの輸送も考えられるが、運行スケジュールを見る限りそれも難しい。絶望的だ。」

その無線を聞いた警官が頭をかかえる。

「会計課含めて8人でどうやったら安全を確保できるんだよ・・・」  
「・・・よかつたらお手伝いしましょうか？」

この選択が、俺と佳代子を結びつけた決定的な要因だった。

「狙撃班はその入り口付近の木の上で待機。通常警備班はWAP C（装輪装甲車）とHMV（高機動車）を中心に全周防御。対戦車班は・・・必要ないだろうがHMV上で待機、必要に応じてM2キヤリバーを使い。FV（装甲戦闘車）は必要な場合のみ35ミリ機関砲を使い。それ以外は7.62ミリ機関銃を使用しろ。いいか？」  
「・・・了解！」「・・・」

「ってなんで戦真が仕切ってた？ 一応総指揮官は俺なんだが」

「一応な。オレは金剛の指示のほうで信用できるからお前は責任だけとればいいんじゃないか？」

「何気に扱い酷いぞ！ まああの指示には文句はないから少し任せしてみるのも手か。」

一人の指揮官が指揮から切り離されて指揮権を戦真に渡していた。

「こちらB狙撃班。3キロ先に皇室の車列を確認。1、2、3輦です。パトカーを含めたら12輦。オクレ」

「こちらでも無線で確認した。まだ待機だ。オーバー」

「こちらA狙撃班。車列上のヘリ6機の動きが変です。一応警視庁のマークは付いているようですが」

「ヘリ？ 野坂警部補、車列上空のヘリコプターはこの所属です」

か？」

野坂警部補とはさつき俺たちを陸軍と勘違いした警官である。

「ヘリコプター？ そんな話は聞いてないぞ？」

別の指揮官が念のために付けておいたのかな？

まさか・・・

車列はもう肉眼ではつきり見える所まで接近している。

その時俺の頭の中は嫌な予感が渦を巻いていた。

「無線士！」

「は、はい！」

急に呼びかけたせいか、若干ビビっている。

「大至急本校総司令部に連絡しろ！コンディション・レッド（戦闘状態）、コブラのスクランブル（緊急発進）を要請する。つとな！」  
「り、了解です！」

N S S Fにも、空軍ほどではないが、スクランブル待機の機体が存在する。陸上国防軍から払い下げられたA H - 1 S D コブラ改がその一つだ。強力な対戦車戦闘能力と、対空戦闘能力をもって、作戦の障害を排除してくれる頼もしい存在であり、今から8分もあればここに到達するはずだ。

だがその時、皇室の車列上空のヘリ2機が車列からはなれ、スライディングドアを開け、黒く細長い物体が突き出された。

と思ったとたん、それが火を噴き、皇室の車輦をズタズタにした。

その後ろの車輦が速度を上げて大破した車輦を追い抜いたことから、あれはダミーなのだろう。

「くそつ。あいにく携帯対空誘導弾はないか。F V！ 35ミリ機関砲撃ち方はじめ！ 弾種A P D S、普通科小銃安全装置解除！」  
「勝手に攻撃してもいいんですか！？」

「学徒訓練指導法第3条2項、この訓練を受ける全隊員には、有事の際独自の指揮官による戦闘開始が許可される！ 今が有事じゃなくってなんだ！」

テロだぞ！ いいから撃て！」

89式装甲戦闘車のエリコン社製90口径35ミリ機関砲KDEがヘリに向けられ、35ミリ機関砲弾が発射される。射撃統制装置により航空機にも攻撃ができるこの装甲戦闘車は、機体側面のエンジンに35ミリ機関砲弾を着弾させ、浮力を失った機体は路上に落下したが、パイロットがとつさに燃料流入を停止させたらしく、爆発せずにそのままガシヤンとつぶれた。だがその間に他の無事な2機のヘリからはファストロープが降ろされ、黒い戦闘服を着た男たちが降下しようとしている。

「まずい、行くぞ！ 天皇を護衛する！」

「よっしゃ！」

全員がHMVやWAPCに乗り込み、ヘリからの銃撃や降下してきた男たちから逃げ惑う、或いは戦う車列に突っ込むと、対戦車班として、M2キャリバーやM134ミニガンに取り付いていた隊員が、明確な敵に向けて12.7ミリ弾と7.62ミリ弾をばら撒く。その弾雨をともに浴びた数名の敵が蜂の巣にされて散っていった。普通科の隊員も89式装甲戦闘車の装甲を盾にしながら64式小銃や89式小銃で敵を牽制し、間を広げつつあった。辺りには既に大小の薬莢が大量に転がり、硝煙の臭いが立ち込めていた。

だが地上にいる敵を倒せても、上空からの銃撃に晒される俺たちは、完全に不利な状況だ。

「コブラはまだか！」

「ぐああ、くそっ肩を撃たれた！」

「衛生員！ こっちも頼む！」

そのような混乱のなか、パトカーの陰にしゃがみこんで、M37エアウェイトの弾を交換している警官がいた。俺は高機動車からあるものを取り出すと背中につき、大破した皇室車輛の陰から走ってそこへ移動する。

「皇宮護衛官ですか？」

「ああそうだ。君たちは？」

「NSSFです。陛下たちはどの車輛に？」

「一番奥の装甲パトカーだ。佳代子様も一緒にいる！」

「わかりました。佐伯！行くぞ！」

「了解！」

今さっき使い切った89式小銃の弾倉を取り替え、薬室に弾を送り込むと、ちょうど近づいてきた黒服に5・56ミリ弾を浴びせ、バラバラになった車列の一番後ろまで走った。だが最後尾の装甲パトカーは、既に短機関銃や拳銃で武装した男たちに囲まれていて、容易に手が出せない。陛下たちは中で抵抗しているようで、男たちがパトカーを破壊しようとしている。

「こちら金剛。陛下を発見したが敵が多く正面突破が出来ない。応援を求む」

『こちら浅田。被害者の避難誘導は粗方終了した。こちらにはあまり近寄ってこないから始めから天皇の身柄が目的の模様。すぐに応援を送る。あとコブラは2分で到着だそうだ』

「サンキュー浅田。敵のヘリには気をつけさせてくれ」

『了解』

さてと。

「佐伯士長。あの状態でパトカーはいつまでもつと思う？ たしか装甲パトカーの防弾性能は俺たちのLAV（軽装甲機動車）と同じだったと思うが」

「うーん……。それなら一刻も早いほうがいいと思いますよ。

たしかLAVの防弾性能は国際派遣仕様で7・62ミリ弾の防御が精一杯の筈です」

「本当か？」

「本当です」

「……。なら急ぐしかないな。お前はこれを持ってる。」

そう言つてさっき高機動車から取り出したもの、分解されたM82 A1、俗に言うバレット対物狙撃銃が入ったケースを佐伯に渡す。

「これで敵のヘリをできるだけ遠ざけるか撃墜してほしい。攻撃されたら逃げる。いいな？」

「了解です。」

返事を受け取ってから別の車輛の陰に移り、89式小銃の銃口だけをのぞかせる。セレクターレバーをア・タ・3・レの内、3に合わせる。3とは三点射モードのことで、引き金を一度引くたびに3発の弾丸が発射されるようになっていた。他のアは安全装置を表し、タは単射、レは連射を表す。

引き金に指をかけ、パトカーを囲む男のうちの一人を狙って指に力を入れる。軽い発砲音とともに男2人が倒れ、他の男たちがそれまで無警戒だった周りを警戒し始めた。その中にヘリに連絡をした者もいたのか、警視庁の偽ロゴを入れたヘリコプターも集まり、周囲の哨戒も始めている。

『こちら佐伯。対空射撃用意完了しました』

「よし。じゃあ右から3番目のヘリのテールローターを叩いてくれ」  
『了解』

数秒後、後ろから重く大きい発砲音が響き、ヘリの尾翼に付いているテールローターを破壊する。2つのローターでバランスを保っているヘリコプターは、尾翼側のローターを破壊されるときりもみしながら落下する。今回も例に洩れず、バランスが壊れて回転し始める。だが他のヘリも近付き過ぎていたのか回転するヘリに巻き込まれて破壊されていく。結果、周囲の哨戒に来ていた2機のうち2機が爆発四散する羽目になった。

だがその代償も大きく、M82A1で狙撃した佐伯士長の居場所がばれてしまっていた。M82の発砲時の煙はかなり大きく目立ちやすいのだ。

『こちら佐伯。1発でバレちゃいました。一時離脱します』

「ありがとう。追いつかれるなよ」

残った1機が佐伯を追い、男たちだけが取り残される。

あとは撃つだけ

セレクターレバーをレに切り替え、指切りバーストを使って次々と敵の包囲網に穴をあけ、俺と他の隊員が突入できる入口を作る。敵

も撃ってきたが、その点は心配ない。俺が遮閉物にしているのは装甲パトカーのエンジン部。一番安全な場所だ。

そんなこんなで89式小銃の弾倉を3回ほど交換し、そろそろ突入しないと弾が無くなるなと思っていた時、空から強烈なダウンウォォッシュとともに弾雨が降り注いだ。また敵のヘリが来たのかと思っただが、弾を受けているのが敵である点、それは違った。ようやくAH-1SDコブラ改が到着したのだ。熱い葉莖が頭に当たって地味に痛い。それほど低空にいるのだ。

『金剛三尉、こちらメタルギア1。遅くなつてすまない』  
コブラのおかげで、パトカーの周りにいる敵の半分が掃討されている。

「こちら金剛。助かりました。後方に敵のヘリが3機展開しています。ステインガーで落としてください」

『了解した。そちらの支援に1機残しておく。メタルギア4だ。自由に使ってやってくれ』

「了解です」

到着したコブラ改は4機。敵のヘリが残り4機残っていることを考えても十二分に戦える。なぜならコブラは純粹な攻撃機。アタツカ  
ーだからだ。

メタルギア4を残した3機のコブラは機体を翻すと胴体側面に搭載されたA-T-A-S空対空型ステインガーを発射し、いとも簡単に敵のヘリを破壊した。

「メタルギア4。こちら金剛。早速だが頼みがある。パトカー周りにいる奴らは俺がやるから、周囲の車輛の陰に敵がいらないか警戒してくれ。それとパトカーには間違っても弾を当てないでくれ」

『了解した』

快いヘリパイの返事をもらうと、ダウンウォォッシュがうちつける中、車輛の陰から飛び出した。そのとたん四方から弾が飛んでくるが、20ミリ弾の雨が降り、それらを駆逐していく。ヘリに感謝しながらまだ周りに残っている敵に89式小銃の銃口を向け、パトカーに

当てないよう撃っていく。パトカーと俺との間にもう遮蔽物はないので、隠れて弾倉を交換することはできない。慎重に弾倉を撃ち切り、交換した89式小銃を使い残った数人の敵に向け撃ち続ける。弾倉を4分の1ほど使って、パトカー周辺の敵は掃討された。

89式小銃を背中にまわし、腰からP226SC7改を抜いて周りから人のいなくなったパトカーに走り寄ると、ドアを開けて（すでに窓が割られていた）中に滑り込む。中には初老の男性が少女を抱えてこっちをにらみつけていた。

「殺すなら私だけにしなさい。この娘は絶対に私が殺させない！」  
老いたしわがれ声だったがしつかりした声だった。ただ自分が敵だと勘違いされているのに気づいてあわてて訂正した。

「ち、違いますよ。私は無島都市学園軍の金剛戦真三等学尉です！  
付近の敵は掃討しましたからもう大丈夫です」

「無島・・・ほ、本当かね？」

「ええ。本当です。あ、ちよつとまっけてください。こちら金剛。  
メタルギア4、周囲の状況を教えてください」

「こちらメタルギア4。現在敵部隊は後方に集結しつつあり、普通科部隊が現在交戦中。ヘリはすべて撃墜した。仮指令本部にまでは戦火が及んでいない。また貴官の周囲に敵影、味方両方無し」

「了解した。交戦区域に戻って部隊を援護してくれ。こっちは俺で何とかする」

「・・・感謝する」

上空で聞こえていたローター音が遠ざかると、まだパトカーのエンジンが動くのを確かめて、89式小銃とP226の弾倉を交換しておいてから、ハンドルを持つ。

「ちよつとどこかに掴ってってください。危ないですよつと」

右側の窓から89式小銃を突き出して、片手でパトカーを運転する。ヘリでは敵影無しと言っていたが、俺には何人かの人影が車輦の下に潜り込んでいるのを何人か目に捉えていた。そして今もこちらに銃口を向けている。

ギョルギョルとタイヤを回転させながら、この車輛が製造されてから最も激しいであろう運転で射線を避けて停止した。

「後悔すんなよ！」

小銃の先にタクティカルベストから取り出した06式小銃てき弾を装着し、敵が潜む車輛群に向け発射する。パシュツという音とともに発射した06式小銃てき弾は、数珠つなぎに追突してバラバラな車列に着弾し、漏れ出たガソリンを伝って車輛を誘爆させた。最初は小さかった爆発音も、今やほとんどの車輛が爆発したことで、ちよつとやりすぎた感が俺の肩にのしかかり、冷や汗がダラダラと流れてきた。だが今は天皇の保護が優先。言い訳だけ考えて他を優先しよう。

『こちらNFHQ！ 金剛三尉、聞こえるか！ 応答しろ！』  
い、今から説教ですか？

「は、はい。こちら金剛。 天皇陛下と佳代子さまを確保。 2人とも無事です」

『爆発があつたがどういうことだ？』

「てき弾を撃つたところガソリンに引火し、誘爆しました。ヘリからの情報で周囲に味方はいなかったので使用しました」

『・・・わかった。 天皇陛下達を連れ絶対に帰還するように』

「了解です。 あ、待つてください、味方の被害は？」

『・・・目立った被害はない。 あつても既に処置が終わり戦線に復帰している。 安心しろ。 この作戦の指揮は司令部が責任を持って受け継いでいる。 お前は天皇陛下の保護に全力を注げ！ いいな？』

「了解しました。 ありがとうございます」

そこで交信を切り、ため息をつく。 これじゃ帰還したとたん加賀美三佐にからかわれること必至だな。

「一体どんな状況なのですか？」

そう切羽詰まった感を言葉に滲ませながら天皇が俺に尋ねる。

「あなた達を狙うテロリストが行動を起こしました。 少し先で私の仲間たちが交戦中です。 司令部に向かうためにその中を突っ切る必

要がありますからシートベルト締めておいてください」

「裏道とかで向こうに回り込めないのですか？」

「敵は警察に偽装したヘリに乗っていました。裏から回るとそういつた連中に仕掛けられる可能性があります」

「そうですか。佳代子。もう大丈夫だからちゃんと座ってベルトを締めなさい」

天皇の腕で守られていた少女がゆっくりと起き上がる。長い黒髪にパツチリした目で、当たりをキョロキョロとせわしく見ていることから、まだおびえていることが分かる。

「ほら佳代子。この人が助けてくれたんだよ」

「・・・分かりました、おじいさま。あなた、金剛三尉といったかしら？」

「あ、はい。ですが三尉は名前ではなく階級ですので間違え無きよう」

「では下の名前も教えてくださいませんか？」

「は？ この場合答えてもいいのか？ 不敬罪とかにならないか？」

ちよつと不安なので陛下をチラリとみると、こつちを見てニヤリとしている。

「せ、戦真です。戦に真実の真で・・・」

「いい名前ですね。NSF隊員にぴったりだわ。」

「あ、ありがとうございます。で、ではそろそろ出発しますので」名前を褒められたのなんて初めてだ・・・。彼女がNSFと言ったときに何か違和感を感じたが、気のせいだろう。

「免許も持つてるのですか？ 戦真さん」

お、女の子に下の名で呼ばれるだなんて・・・夢じゃねえ！ 俺はまだイケる！・・・なにがだろう？

「はい！ 車輛免許の種別は全部持っています！ 次はヘリに挑戦するつもりです！」

「そ、そう。元気がいいんですね・・・」

あ、やばい。引かれちゃったか？ 冷静に冷静に。

「で、では行きますのでどこかに掴っておいてください」

再びパトカーの1UR—FEガソリンエンジンが吠え、誘爆した車輛の間を縫うように進み、前方ではNSSFの車輛が弾幕を張っているのが見えるようになった。

「金剛からNFHQ。陛下をお連れした！ 射撃を中止してくれ」

『少し待て。もうすぐ弾幕を張る必要もなくなる』

パトカーをドリフトさせながら安全域に停止させ、回りを警戒しながら交戦地を見ると、すでに残っている敵は僅かであることがわかった。

「降伏の勧告はしたのか？」

『弾幕を張る前に3回ほど、さつき2回やった』

「それでも降伏しないと・・・」

敵を見る限りじゃ後方支援もないみたいだし、救援、増援もない。だが降伏もしない。一体何が目的なんだ？

そうこうする間に敵の残りは20人を切り、さすがに作戦が成り立たなくなったのか、それとも弾薬が尽きたのか、手を挙げて降伏を表すものが表われてきた。

やがて残った十数人の敵が全て降伏し、辺りから銃声が掻き消えた。『NFHQからNSSF全隊員へ。降伏した敵の武装解除をし、拘束せよ。反抗する者は射殺することを許可する。それと金剛隊員は即時仮本部へ陛下たちをお連れせよ』

俺は無線に了解とだけ伝えると、パトカーを発進させた。窓から見えるのはそこら中に落ちた空薬莢と血痕、墜落したヘリの破片であり、激しい戦闘だったことが伺える。遠くからはパトカーのサイレンと陸上国防軍かNSSFのものと思われるヘリコプターのローター音が聞こえている。だが余りにも到着が遅すぎだ。俺たちがいなかったらどうするつもりだったのだろう。

「戦真アー！ 無事かア！」

突然名前を呼ばれた方向を見ると、俺の第2分隊の隊員たちが手を振っている。佐伯士長も無事だったようで、M82A1を肩に掛け

てこつちをみて笑っている。

「おう！ 無事だよ！」

俺も負けじと大声で無事をアピールして、またあとでな、と言っておく。通信によると、現在戦闘指揮は学園司令部からの応援である87式指揮通信車 C C V で行われているらしい。他にも応援として87式自走高射機関砲 A A G 、74式戦車が到着していて、さながら戦争中のようなのである。

そのような臨時車輛待機所にパトカーを停車させると、後部座席を向いて状況説明をする。

「一応ここがN S S Fの仮本部です。これから指揮官の元にお2人をお連れして、警察か軍に身柄を引き渡します」

「分かりました」

「そうですか。では行きましょう」

天皇がこれからの行動を承知すると、肩に89式小銃を掛けてパトカーをおり、周りを同じく89式小銃をもった普通科隊員が警備する87式指揮通信車に向かった。

後部のハッチは開放されていて、内部は降伏した敵についての通信が飛び交い、それに対する対応と処理にパニックになっていた。

「金剛戦真三等学尉、ただ今天皇陛下をお連れしました！」

全員に聞こえるよう大声で怒鳴ると、周囲にいた数十人の隊員が、こつちにむかって敬礼をする。もちろん俺にはなくて天皇陛下らに向けてだ。

「陛下。お初にお目にかかります加賀美義仁三等学佐です」

「ありがとう。君たちの行動には大いに感謝している。是非皇宮護衛として配置したいくらいだ。これなら佳代子も安全だろう」

「……え？ それはどういう？」

「戦真か。よくやった。向かえのパトカーがもうすぐ到着するそうさ。それまで陛下たちの護衛を継続してくれ。いいな？」

まるで一切関わるなどでもないような言葉に、俺は頷くしかない。その後パトカーが到着し、H & K U M Pを持った警官に陛下たち

は無事保護されたかに思われた。俺が運転手の警官が不気味な笑いをしているのに気がつくまでは……。

まだ俺以外はそれに気がついていない。再び偽警察ヘリのときのよ  
うな嫌な予感が急速に首をもたげ始める。

手が無意識に上げた89式小銃の安全装置を解除する。そして・

・  
パンパンツという軽い音とともに警官が構えたUMPから45AP  
C弾が射出され見送りに来ていた加賀美三佐の足首を襲う。

瞬時に状況を理解した俺はとっさに銃床をUMPを撃った警官に叩  
きつけると、天皇の服の襟をむんずと掴んで車内から引きずりおろ  
した。呆気に取りられていた周りの隊員もすぐさま手元の銃器を構え  
るが、耳をつんざく叫び声が車内から聞こえ、撃つのを躊躇してし  
まった。見ると偽警官のひとり、佳代子内親王の喉元にサバイバ  
ルナイフを突き付け、目で撃ったら殺すと訴えている。睨みつける  
とそいつはニヤリと笑い、車を出させた。佳代子の人質に取られて  
いる以上、こちらは攻撃できない。彼らの行動の理由も分からぬま  
ま、俺たちはまんまと警官に粉した敵に人質を取られてしまったの  
である。

「クソッ！」

俺は悪態をつくと走って軽装甲機動車に乗り込む。無線機からは勝  
手な行動はするなと何度も通信がはいったが全て無視し、LAVを  
急発進させた。

## 2 話（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

### 3話（前書き）

作戦の雑さ指摘は勘弁してください

### 3話

「一体どういうことだ！　なぜ天皇家から人質を出さなければなら  
ないのだ！　責任は君たちにあるのだろうな！」

机を叩きながらそう怒鳴るのは全国の警察のトップである柿澤嶺明<sup>かきざわみねあき</sup>  
警視總監である。そしてその前に立っているのはNSSFの事実上  
の指揮官の加賀美三佐・・・の代理である秋月潤　あきづきじゅん  
一等学尉である。本人は足を撃たれたことによる動脈欠損とアキ  
レス腱の切断で、入院している。

「ですから、そもそもあなた方の対応に問題があったのです。我々  
はあくまで学生自衛部隊です。あの地点を通らなければより多大な  
被害が出ていた可能性があります。その点我々は戦域の拡大を防ぎ、  
関係者の保護もすぐさま行いました。感謝されることはあれど、非  
難されるわけではありません。それに初動隊員から聞いたところによ  
ると、まともな治安維持に当たったことのない会計課の人員を含  
め、八人の警官しかあの付近に配置されていなかったらしいではな  
いですか。あとから陸軍の応援の予定があったとはいえ、この態勢  
はあまりに無謀です。その点含め、しっかりと内親王救出作戦を計  
画していただきたい。また、現在一時的に天皇陛下らを救出した隊  
員が、単独で誘拐した車輛を追跡しています。現場の判断でその隊  
員の部下六名を乗せた輸送ヘリと攻撃ヘリを向わせましたが、司令  
部に陸軍・警察が合流した現在、指揮権は我々ではなくあなた方に  
存在します。私はこれからNSSFの戦略会議がありますので失礼  
します。最後に言っておきますが、我がNSSFの隊員が1人でも  
戦い続けるなら、我々はいかなる支援も惜しみません。では失礼」  
秋月は言いたいことだけスラスラと吐き出すと、總監室を出て行っ  
てしまった。残された柿澤は、この学生風情が、と苦虫を噛み潰し  
たような顔で、電話をとった。

「總監だ。NSSFの隊員とは絶対に捜査協力をするな。動く隊員

がいたら拘束しろ。いいな？」

そのすぐ外では一人の少年が無線機に命令を吹き込んでいた。

「NSSFの行動を妨害する警官は敵と区別がつかないため拘束しろ。理由もそれでいい。各自金剛隊員のバックアップに全力を注ぐよう……」

秋月もまた、総監の考えを先読みして対策を打ち出していたのだった。

同日 航空国防軍無島基地

キィー——ン

この基地では一機の戦闘攻撃機が空へ上がろうとしていた。機体の名前はTF/A-4NSF。国防軍前身の自衛隊の頃から練習機や曲芸飛行隊機として使われてきたT-4の大型強化版に12.7ミリバルカン砲を1門、対空ミサイルと、その他AH-1SD共通のロケット弾・ミサイルを搭載できるよう改造したものだ。この改造には、主に無島学園付属大学の理工学部が関わっている。このことからわかるように、機体とパイロットは無島学園の所属なのである。他の学校と比べれば、余りにも広大な敷地をもつ無島学園であるが、流石に自前の滑走路を建設するのは不可能だったのだ。いや、現実には不可能ではないが、それをするとは普通科の訓練敷地が削られてしまうから、一番近くに存在するこの無島航空基地に小規模の拠点を置いていたのだった。

さて、なぜいまこの戦闘攻撃機が離陸しようとしているかというと、内親王誘拐事件を起こした犯人を追うために計画された作戦に入る邪魔を取り除くためである。数基のミサイルが接続されているハードポイントにはほとんど学園の独力で作り上げた観測ポッドが取り付けられ、偵察任務に使用することができるようになっている。

『こちら国防空軍無島管制塔。貴機の離陸は許可出来ない。営門前に警官隊が来ている。直ちに離陸作業を中止し、出頭せよ。繰り返し……』

だが既に滑走路への侵入を終え、加速を始めていたTF/A-4N SFのパイロットの俺、高波剛三等学佐は、全ての警告を無視し、機体を安定させることに集中した。指揮官代理の秋月一尉から、妨害をする警官は拘束、すなわち無視しろと全隊員に連絡があったからだ。恐らく基地に残る機体とそのパイロットたちは警察からの拘束の対象になるだろうが、その点心配はいらない。指揮官の連絡にともない、30名の普通科隊員からなる護衛隊が派遣されて来たのだ。簡単にはいかないだろう。

『こちら無島空軍管制塔。飛行中のF/A-4に告ぐ。直ちに飛行を止め、基地へ帰還せよ。繰り返す・・・』

「うるせえ！ こっちにも上の命令つてもんがあるんでね。あいつら警察に主導権握られちゃたまんねえよ！」

高波は通信マイクにそれだけ吹き込むと、ECMを起動させて通信を無島学園だけに限定した。

「おい、剛」

「・・・なんだ？」

ここでした声は決して幽霊ではない。複座のT-4と同じく、F/A-4も複座なのだ。RIOの村雨悟三等学佐である。

「あんまり向こうを刺激するな。平時じゃ管制官と仲良かっただろ？」

「そうだ。だからこそもう少し俺たちの事情を考えてほしかった」

高波達は平時・・・というか暇なときは空軍基地内の本職パイロットたちとよく話す機会があった。なので中には非番のときなどは一緒に出かける仲のものもあったのだが、これではまるで仲間割れだ。「クソッ。スクランブル機まで上げてきやがった」

機内に無理やり取りつけてある無島学園製高性能レーダーの画面を見ながら高波がつぶやく。

「F-3か。F/A-4じゃ不利・・・て言うか勝負にならないな」

F-3とは航空国防軍最新鋭の戦闘機だ。数年前に開発が終了したATD-X「心神」を正式・量産化したもので、最大速度マッハ3、

2、航続距離7千キロ、戦闘行動半径1千200キロの世界最強のステルス戦闘機だ。F-22すら凌駕するその機体に、たかだかさ最大速度マッハ0.9、戦闘行動半径200キロの機体が勝てる要素は微塵もない。

何とか振り切ろうと急旋回をかけ、失速寸前で急降下をかけるが後ろに付くF-3は全く動じることなくこの機をロックし続けている。現にさつきからロックアラートが鳴りつばなしだ。それもそのはず、F-3には最高の機動力を得るため、推力偏向パドルというのが装備されているのだ。

「こりゃ無理だ。一端基地に戻って乗り換えだ。」

NSSF航空戦闘団の機体には、F/A-4の他にもう一種の機体が存在する。以前は航空国防軍も装備していたF-15DJである。この機体はNSSFが装備する兵器の中で、最も高価なものであり、それゆえ3機しか保有していない。国防軍の払い下げとは言え、いまだ世界の空軍では一線級の装備として使用されているのだ。とはいっても、F-3との模擬空中戦で、勝てた試しはほとんどない。ほとんどというのは数少ないF-3撃墜者の中にF-15DJで戦った俺と村雨の名があるからだ。

「でもどうすんだ？ 着陸したとたんに警務隊か警察に囲まれるぞ？」

「それがなあ・・・」

いつそのこと機関砲で蹴散らすか・・・と物騒なことを考えていた時、無線からNSSF専用周波数で通信があった。

『こちら航空国防軍。ただちにワレの誘導の従い着陸せよ・・・なんて言うかよ、剛！』

突然ヘルメットに響いた声に驚く。

「せ、仙石教官！？ 一体どうして！」

仙石教官とは仙石鷹空<sup>せんごくたかあき</sup>二等空佐、航空国防軍のパイロットであり、自分たちにF-15DJの訓練を施してくれた教官である。同時に無線通信にも優れており、今もこうして専用回線で通信をしている。

一体どうやっているのかはなはだ疑問ではあるが。

『無島の学生には何度か世話になったからな。少しでも協力してやる。俺に従ったふりをして滑走路に降り、俺が時間を稼ぐからその間にイーグルに乗り換える。いいな？』

「ありがとうございます！」

また貸しを作ってしまったと感じながら、俺は機体を旋回させると仙石機に続いた。

NSSF航空戦闘団専用の格納庫兼待機所ではここでの最上級者が首を傾げていた。彼が覗く双眼鏡の先には高波たちが乗ったF/A-4が飛行している。格納庫横ではNSSFの護衛隊と航空国防軍の警務隊が対峙している。だが問題はそこではない。先程は無線封鎖をして管制塔の指示を無視してまで強硬離陸をした高波・村雨機がスクランブル機が上がったあと一転、すぐに指示に従って降下を始めたのだ。一体どういうことだろう。あいつらの性格では例えF-3のパイロットである仙石三佐の指示だって聞かないはずなのだが。そういえばあのスクランブル機に乗っていたのは仙石三佐だった気が・・・

そうか！

NSSF航空戦闘団団長の愛宕誠治 あたごせいじ 二等学佐は彼らの意図を明確にくみ取り、整備員に指示を出した。

「F-15DJの戦闘発進準備をせよ」と。

その命令の正確さは数分後に入った高波からの無線ではつきりとした。

格納庫の戦闘機が発進準備システムに入れられるとガラス壁で隔離された制御室で、武装管理員がタッチパネルを操作して搭載兵器を選択していく。数年前まで手作業で行われたミサイルの搭載などは、現在この自動搭載装置で行われている。海上国防軍の航空母艦に世界初のこの装置が組み込まれてからというもの、世界中の航空母

艦に搭載が始まり、ついには陸上の航空基地にも導入され始めているのだ。白いアームが大量に保管された空対空ミサイル AAM や空対地・艦ミサイル ASM、JDAM（誘導爆弾の一種）の中から数発のAAM、ASMを取りだすと翼下と胴体下のハードポイントと呼ばれる接続部分に次々と搭載していく。TF/A-4N SFにも搭載されている観測ポッドと同型の観測装置も搭載し、片側の翼付け根のあたりでは、搭載するM61A1 20ミリバルカン砲の弾薬がベルトリンクに繋がれて補給されていた。それらの光景はさながら特撮映画に出てくる戦闘機の発進準備のようであった。十数秒で装備の搭載を終えたF-15Dは、ベルトコンベアで直通滑走路の発進待機所まで運ばれ、停止した。既に兵装の安全装置は解除され、いつでも出撃できる体制である。この直通滑走路とは格納庫から真っすぐに伸びる滑走路で、これまたNSSF専用である。

F/A-4が停止位置を間違えなければ、パイロットたちが走って十数秒で到達する距離であり、それゆえ警務隊にも見つかったしまう。だがそれから守るのもNSSF戦闘航空団整備員の仕事だった。既に発進準備が整い、パイロットの到着を待つのみであったと言える。

『しくじるなよ！』

高度を順調に下げ、あと数秒で接地するといふとき、仙石教官が作戦を開始する。俺たちに先行して着陸態勢だった彼の機体は急上昇し、俺たちは滑走路へ機体を着陸させると、まだ停止しないうちにコックピットのキャノピー（風防）を開け、降りる準備をする。視界の隅ではMP5を構えた警察隊員らがこちらへ走ってくるのがみえた。その時、仙石教官の乗ったF-3の機首が光り、20ミリバルカン砲が吠えた。もちろん使用弾薬はLED発光体を使った非殺傷性曳光弾で、当たっても少し痛いくらいだ。だがそれを知らない警務隊は、味方のはずのF-3が自分たちを攻撃したことで、すっ

かり怒っていた。頭を抱えて伏せていた彼らはMP5を構えると、俺たちがいたところへ9ミリ弾をばらまいた。しかしそこにあるのは軽く防弾装甲を施したF/A-4だけであり。9ミリ弾はことごとく跳ね返されていた。俺たちは仙石機が掃射をしている間に直通滑走路に発進準備万端で駐機されているF-15DJに向かって逃走していたのだ。録4つ式小銃を持って機体を守っていた整備員たちに感謝しつつ、機体に飛び乗り、エンジンを始動させる。間発いれず整備員がミサイルの安全ピンを引き抜き、GOサインを出す。元練習機のエンジンとは違い強力なF100-IHI-220Eターボファンエンジンに火が入り、出力が上がっていく。機体の車輪止めは既に外され、ゆっくりと機体が加速していき、あっという間に離陸していった。

その後、愛宕二等学佐の弁護で、警察の横暴によってNSSFが追われていることが空軍基地司令によって確認され、周辺の基地・駐屯地へ通達、NSSFの隊員保護がおこなわれた。よって各地で軍と警察の対立が起きたが、幸い警察庁長官によるNSSFへの謝罪により、この対立は数時間で幕を閉じた。だが依然佳代子内親王の身柄は保護されておらず、捜査が続けられている……。

これじゃあ目立ちすぎる……

そう気がついたのは追跡を始めてから数分が経った頃だった。俺が今運転しているのは国防軍でも使用されている軽装甲機動車、通称LAV。当然車体の色はグリーンとブラウンの迷彩で、一般道を走るテロリストのパトカーを追うには少し無理があった。むしろ緊急車輛に偽装した敵の方が有利であった。

『NFHQ、加賀美より金剛二尉。内親王救出作戦の詳細を伝える。本作戦では車輛での突入は行わない。CH-47JAとUH-1Jを用いたヘリボーンを行う。二尉にはその作戦指揮をとらせることになった。現在F-15DJによる追跡対象の航空威力追跡を行っている。安心して即時LAVでの追跡を中止し、本校司令部に帰還

せよ。開始時間は一六三〇時。やってもらえるか？」

「・・・なぜ警察や国防軍がやらないのですか？」

『警察に対し、相手の装備、錬度が高すぎる。だからと言って軍を簡単に動かせるほどまだこの国はシビリアンコントロールが緩くはない。だからだ。』

「だから俺たちが・・・」

『いやそれだけでも無くてな。・・・あまり言いたくはなかったが、この際暴露させてもらおう。佳代子内親王はな、うちの学生なんだ』  
「・・・・・・・・！」

『現天皇からの推薦でな。小学校のころからここに通っている。世間では学習館に通っていることになっているがな』

「・・・宮内庁に恩を売るってか？」

『そうかもしれない』

「・・・わかった、やらせて頂くよ」

『そうか。じゃあ、待ってるからな』

「了解。それはそうと、加賀美さん、足は大丈夫なのか？」

『そりゃあな、大丈夫じゃない。まあ今は隊内の医務科に移ったからな。ある程度はOKだ』

「あとでな」

『おい！ ちよつ、まゝ』

俺は無線を切ると渋滞の列から抜けＵターンし、再びNSSFの本拠地、無島学園へと戻る道をたどった

戦真が追跡から離脱した後、何機かに分けて引き続き追跡を続けている機体があった。

「こちらメーヴェワン。旧工業地帯に例のパトカーを確認」

メーヴェワンとはNSSF所属の観測攻撃ヘリ、OH-1A改クナイの呼び出し符号 コールサイン である。本校での説明が終わった後、すぐさま偵察任務が命じられた機だ。

『現在そちらに陸軍とNSSF普通科の空挺部隊が向かっている。』

衛星も固定されたため見つからないうちに現地より離脱し、合流せよ』

「了解。メーヴェワン、これより合流する。ん？ ヤバい、SAMだ！ チャフ発射！」

タンDEM式に配置された座席の後部にいるパイロットは、その手元にある低光量ディスプレイに対空ミサイルを表すアイコンが表示された瞬間から改造前の機体から受け継いだ機動力のいい機体を生かし、急上昇、ロール、ターン、急降下とミサイルの死角へ逃れた。幸い一発だけだった対空ミサイルはOH-1A改がばら撒いたチャフに惑わされて爆発した。

「発射時の熱源反応でSAM発射機を確認。他にもSAM6基と対空機関砲7基を確認！ 制空権無し！ 全速離脱する！」

一方その頃（警察側の謝罪前）、警察の追撃から逃げ、慌ただしく無島学園に戻ってきたNSSFの隊員たちは、校内の講堂で事態の収束に向けた作戦行動の概要を聞かされていた。その中には戦真の小隊の部下の姿もあるが、先ほどの戦闘の直後のため、皆完全武装という物々しい出で立ちであった。中でも佐伯士長には大口徑対物狙撃銃が加わるため、余計にいかつくみえた。校門の鉄柵門の前にはSATが？突入しよう？待機しているが、そんなものに侵入を許すほど学園の警備は甘くない。侵入者があれば全自動のセンチガン M134 が対処するし、窓は厚さ7センチの防弾ガラス。現在コンディション・レッドの警備隊員もいる。侵入したところで完全武装の隊員に敵う訳が無い。

「偵察機からの情報ですと、敵の分布地には対空機関砲や対空ミサイル発射機が七から八基確認されています。現在空挺隊員がそれらの破壊任務を遂行し始めているますが、この地図に示されるように、非常に広く配置されているため、すべての破壊は不可能だと思われます。そのため輸送ヘリの使用は最小限にしなければなりません。まず、普通科ですが、第三中隊第一、第四小隊の全八〇名で

編成します。武装は各自A級装備に必要なものを追加すること。航空科は偵察・先制攻撃でOH-1A改を3機、戦闘機を全機、突入時にAH-1SDを4機、CH-47JAを2機、ガンシップ化したUH-1J改を2機使用し、北東からこのポイントAに降下します。ヘリを一瞬だけ着陸させ兵員を下ろす作戦になります」

そう言つて作戦を説明する男子高生は正面に置かれたスクリーンに映しだされている旧工業地帯の地図の一点を赤い光点で表した。その周りには比較的少ないとは言えSAM発射機や対空機関砲の存在が示されている。

「また海上要員は、敵陣地が旧内海工業地帯に存在するため、ミサイル艇2隻で南の海側から接近します。艇内には第1中隊第2・第3小隊20名を乗艇させます。武装は突入部隊と同等のものを使用し、万が一の第2突入部隊とします。」

そう言つて再び地図の海側の1点を光点で表した。この付近は発見された兵器はないとしても、敵陣に最も近いことを考えると相変わらず危険な場所である。

「編成は以上ですが、選発部隊以外の部隊も万が一に備えコンディション・レッドでいてください。では各自弾薬補給、部隊間ブリーフィングをお願いします。突入作戦開始は一六三〇時、普通科はその10分前にはグラウンドに集合してください」

作戦前の夜が近づく……

### 3 話（後書き）

とりあえずストックはこれで終わりです。  
更新不定期に以降するということです。

ご意見・ご感想をお待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2764y/>

---

NSSF 都市学園軍

2011年11月10日02時44分発行